

健康文化

## 名古屋大学6年間の思い出

松村 悠子

### はじめに：道産子の名古屋評

北海道で生まれ育った私にとって、名古屋の生活がどのようなことになるのか想像のつかないものでした。生粋の道産子たちは「文化のちがう土地」ということで言葉の語尾には「ミャー」をつけること、話す時には言葉に衣をかぶせて何を言っているのか解らない位曖昧に！更には豊臣秀吉の悪口を言わないこと（歴史を大切に）。名古屋人は名古屋以外で育った人は好まない、などとさんざん聞かされ脅かされました。そして札幌の街に住み着いた元東海人たちからは「気候があまりにも違う」点をアドヴァイスされ、湿度が高いからふとんや洋服などは重ねないこと（重ねるとかびてしまう）、ゴキブリは実は人のぬくもりが好きで、寝床に入ってくる、だから共存できるよう心の準備をすること。ダニが繁殖しやすいので寝床はベッドにすること（決して床に座ったりしない）。ムカデがたくさん居るので油いためにすると美味しい等と教えてくれました。こうした諸々のアドヴァイスを下された方々には、ムカデの油いために如何に美味であるかなど（いまだムカデにはお目にかかっておりません）を添えた便りをだしております。やさしい友人たちの送別の言葉は、冗談と思いながらも頭の隅に残るものです。最初の1年間は職場の仲間の会話についていけないことが時々起り、面喰らうことが多々ありました。今思い起こしてみると、過去からの流れが見えないために会話の意図がつかめないということなのですが、当時の私はわかったような顔をしながらも、実はチンプンカンプンなことが多く、内心は「やはり受け入れてもらえないのかな？」という錯角が起り不安な時期だったことがよみがえります。

以下は6年間の中で印象深いことをまとめてみます。

### 1. 学生が与えてくれる感動

私は専門学校で4年間と3年制短大で15年間看護の教育に携わってきました。看護という分野にどっぷりつきながら、常に臨床看護のあり方を追求し、後輩に伝えることに誇りと情熱を注いできました。専門学校から短大に移行し

た時、教育内容はどのように換えなければならないのか楽しく悩みました。看護独自の領域とは何か、それを教えるにはどうすれば良いのか、社会の変化や医療の変化の見通しと看護の基礎教育のあり方、そして実際の臨床看護の展開は基礎教育で学んだ基礎の上に応用として展開しているのかなどと疑問が山程ありました。私の専門の「意識障害のある患者の看護」を基軸にしながら上記の疑問を少しずつ形ある理論展開へと導き授業を展開してきました。そして今度はこれを名古屋大学で、看護大学レベルへとグレードアップした講義ができるのです。看護教師としてのびやかに自由に講義ができる喜びはひとしおです。学生たちの瞳が輝いて、言わんとすることがグイグイ伝わっている実感を持ちました。自己学習としての課題についての質問も積極的で、楽しみながら学んでいる学生も結構居るようです。こうなると教える側も張り切りたくなります。少し難しいかなと思える抽象語をふくめながら、学生の反応とのやりとりが楽しい毎日を送ることができるようになりました。優秀な学生に教えるということは何と楽しく贅沢なことでしょう。その、将来を託すにふさわしい学生たちと向き合う時、溢れるように夢を語りたくなり、期待に胸がふくらむのです。

「ONLY ONE」これは名古屋大学の目指している特徴であると就任直後に聞かされた総長の言葉で衝撃的でした。ナンバーワンではないのだと強調されていたのが印象的でした。その言葉を学生たちにくり返し伝達しながら、名大だからこそ一人一人の個性が輝き将来への発展の可能性を感じることができたのです。

## 2. 看護実習での学生の成長

看護は理論や知識をもっていれば良い看護実践ができるというものではありません。患者の前に立つ時、患者にとって必要な何らかの行為を示さなければ、そして患者が納得・満足がなければ看護実践とは言えないのです。実習とは、実際の看護師が働く実践の場に学生が身をおき、看護職としての立場で患者のケアを行うことです。ケアを行うにあたり学内の講義で学んだ知識・技術・態度の統合をはかりつつ看護の過程をふみ、学内で学んだことを実地に検証し理解を深めることをいいます。ですから「わかる」段階から「実践できる」段階に到達することを目標としております。学生はこれまで親と教師しか知らない世界で生きてきました。それが患者という多くは目上であり他人であり病気にかかって悩んでいる人に接するのです。こわくてたまらない気持ちが表現されます。そのため知識武装に入り病気の部分だけを見ようとします。しかし看護はそれを許しません。看護は「人格を持った社会的存在としての人」を対象（患者）としていますから、患者の特性が理解できなければ看護が成り立たないこ

とを学生は良く知っているのです。「知る・わかる」から「実践できる」になるために学生は大変苦勞をします。以下に学生の実践例を御紹介します。

学生が受け持たせていただいた患者は（Aさん）65才の女性で、70才の夫と40才の長男（嫁と孫2人）で生活していました。嫁は仕事をもっているため、家事のすべてをAさんが入院直前までおこなってきた気丈な方です。Aさんは肺がんの末期にあり、自分では気づいていません。そんなAさんを受け持つことに決まり挨拶に病室を訪ねると、昼食は手つかずのままで「腹が減っているのに誰も手伝ってくれない。受け持ちたいのなら何故早く来んのだ！」と怒鳴ったという。そして「トイレ！」と叫ぶ。立ち上がりにかそうとすると「役にたたん！あっちへ行け」と言われ、学生は途方にくれました。このような状態が1週間続いた後、学生の看護は「肺がんの進行を観察しながらも、清潔を保ち食事が美味しく食べられるよう援助する。」という計画を立ててきました。しかし実際にはすべて拒否され何もできない関係が続きました。学生はAさんが嫌いと呼んで泣き出してしまいました。私には学生の気持ちは良くわかりません。しかし敢えて一押ししてみるのが教師です。「Aさんの心を観てみましょう。貴女に攻撃的なのは理由がないしおかしいんではない？」とアドヴァイスしたところ、学生はAさんの言葉にしっかりと耳を傾ける努力をし、心を知ろうと努力をはじめました。そしてAさんが「息子が面会に毎日来るけれど、少しも私のことを聴いてくれない。あのバカ息子、何の役にも立たない、寂しいわ」「先生は歩けちゅうけどできない！無理ばかり言って、私のこと知らんのだ」「隣の患者が私のことダメなやつという。うるさくてたまらん」などという言葉が時折聞こえてくるようになりました。これらの言葉は、Aさんの心が孤独に苛まれていることを充分理解できる表現です。これに気づいた学生は、Aさんの側に座りAさんの手を取りながらAさんの話しを聞き込むことにしました。Aさんにとっては学生が最も信頼のできる存在になっていったのです。そしてAさんは学生の言うことなら何でも「ウンウン」と言い、ケアを快く承諾し、安定した精神状態になりました。学生はAさんの夫や息子に、Aさんの思いを伝えました。1月後、Aさんは夫や息子に見守られて静かに息を引き取りました。学生はレポートにこう書いています。「Aさんに出会って最初のころ、何と我が儘な人かと腹が立った。しかし言動の背景に、愛する息子や主治医や同室者などに対するニードのズレや苛立ちが渦巻き、どうすれば良いのか解らないと苦悩している孤独なAさんの姿が見えてきた。そして私もその一人であり、苛立ちを増強させる存在であった。何と残酷なことをしてしまったのだろう。Aさ

んの必死で悲しみに耐えている姿が見えて来た時、その苦悩が我が身のように感じられた。Aさんは今天国で安らかだろうか？Aさんごめんなさい。」

学生にとってはつらい体験だったことでしょう。しかし見事に看護本来の姿を学びとることができたのです。そして彼女は成長しました。患者の苦しみや悲しみを観ることができ、ケアの大きさを学びとったのです。実習によって知識だけでは実践できない看護の深さも体験できたのです。多くの学生たちは、こうした学内で学べない体験をしながら、素人から専門職能人へと見事な脱皮をする様を示してくれます。

### 3. 看護教育と臨床看護の統合と調整

学生が看護を学ぶためには、看護師の後ろ姿を学べといわれます。しかし名大病院のような大きな組織となると、簡単に時代を先取りした看護の実施は困難です。特に現代は患者の権利が最も優先され、患者の意志決定に添い、インフォームドコンセントが重視され、倫理問題が常に議論される「患者中心の医療」の時代です。実習は徹底的にこの思考にそって行動化されるよう仕組まれております。こうした実習場の調整のために実習委員を4年間引き受け、看護部との連携を密にしながら、研修の講師を1年に数回引き受け看護師との関係を円滑にし、教育と臨床の遊離を避けるべくお互い努力を惜しまず発展を目指しております。幸いにも、看護部の教育関係の師長さんたちは学生及び看護師への教育環境には非常に熱心で、更に大学教育レベルに関心を高めていただいております。こうした環境は全国的にみても少ないのが現状です（大体仲が悪いようです）。名大の看護学生の実習は更に質が高まるでしょう。

### おわりに：糖尿病の看護研究者へと変身

昨年は仕事上の役割から、緊張の連続状態にありました。そのためか糖尿病1型と診断され、生まれて始めて入院を経験いたしました。今まで医療者側から患者を観ていたのが、患者側から医療者を観察する機会にめぐまれたわけです。初めて大きなズレが存在していることに気づかされ、現在授業案も再考中となりました。意識障害の看護から糖尿病患者の看護へと関心は移り変わり、今後はこの研究を深めて行こうと決心している次第です。名古屋大学からの最後に頂く大きな課題を大切に育んでいくつもりでおります。

(名古屋大学医学部保健学科教授・看護学専攻)